島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第20巻　15～23頁　昭和61年12月

心身症児（慢性尋麻疹）の母親に対する並行母親面接に関する一考察

大　西　俊　江*

Toshie ONISHI

A study of the process of collaborative mother's counseling for a child of the psychosomatic disease (chronic nettle rash).

I．はじめに

心身症は，1970年に日本精神身体医学会において，「身体症状を主とするが，その診断と治療に心理的因子についての配慮がとくに重要な意味をもつ病態」と定義されている。さらに，「身体的原因によって発症した疾患であっても，その経過に心理的な因子が重要な役割を演ずるようになった症例は，心身症として扱ったほうがよい」とされている。その症状，病態はさまざまで，胃潰瘍，気管支喘息，関節リウマチ，皮膚炎などは，その代表的なものである。特に，小児心身症は，「心理的要因が強く関与し，心身反応（あるいは，精神生理反応）の障害（不適応状態）として，身体症状，疾患，神経性習癖などを現わし，心理的治療や環境調整がきわめて有効と予想される病態である，」と云われている（高木1985）。

心身症の症状形成のメカニズムについては，生理学的立場から，キャノン（Cannon, W. B.）の緊急反応，セリエ（Selye, H.）の汎適応症候群などの理論がある。また心理学的にも，精神交互作用（森田理論），暗示作用，転換メカニズムなど考えられている。

更に，子どもに心身症が起こりやすい理由として，高木は，発達的観点から次の5項目をあげている。

(1) 精神身体ともに未熟，未分化で，その反応は全体的で極端，種々の障害を起こしやすい。

(2) 間脳および大脳辺縁系（旧皮質）に比し，大脳新皮質の発育が不十分であるため，感情を理性で統御することが非常に困難である。

(3) 子どもの発達は決して直線的ではない。幼児期（3～5才）および思春期は，ホルモン系の機能的変化が著しいので，ホルモン系，自律神経系，情動などの機能のバランスが乱れ，障害が起こりやすい。その結果，心身機能における不適応反応や問題行動が多く発生する。

(4) 発育の旺盛な時期には，生のエネルギー（成長・発達の潜在力，衝動など）と外部環境との摩擦や抑圧によって欲求不満が起こりやすいので，このとき心身の不適応反応が現われる。

(5) 子どもは経験に乏しく，いろいろの事態を正しく理解し，適当に調節し処理することが困難である。心理的防衛機制の発達も不十分である。

心身症の治療には，特有の治療法があるわけではないが，特に子どもの場合，親の参加がきわめて重要であることは，臨床的に充分実証されている。また近年，家族全体を治療対象として治療が展開される精神療法が，家族療法あるいは，家族カウンセリングとして注目されるようになってきている。

筆者は，子どもの問題で来談した母親に，母親面接を行なうことの有効性について，一吃音児の母親の治療実践を通して考察した。（大西，小椋，1982）

本稿は，慢性尋麻疹の子どもの治療に来所した母親に対して，子どもの治療と並行して行なった母親面接の経過を述べ，母子関係の変容と子どもの症状の変化，また症状発生の要因について考察したい。

II．事　　例

(1) クライエント；長男（以下Yと記す。5才6ケ月）の慢性尋麻疹のことで来談した母親（以下Mと記

* 島根大学教育学部教育心理学研究室

す。）20代後半。

(2) 家族構成

夫（31才）本人，長男Y，長女H（2才7ケ月）

(3) 家庭状況

夫婦で飲食店経営。両隣りに夫の両親と夫の異母兄（次男）の家族が住んでいる。夫の母親は後妻で，先妻の長男とは3才しか違わず，諍いがあり，家を出てしまった。跡をついでいるのは次兄である。夫には異母兄2人と異母姉が1人いる。かなりの財産があるので，2年前（夫の）父親の財産相続を巡って大騒ぎがあった。夫の母（姑）は，一人息子の嫁ということで，Mを特別扱いしているが，それが却って義兄の嫁などとの板ばさみになって辛いことが面接中明らかにされた（24回）。

(4) 相談歴

Y4才6ケ月時（夏の終り頃），首から上と上下肢の関節から先を除いた全身に尋麻疹がでだした。皮膚科を受診し，投薬を受けたが，3日間発疹（服薬）2日間消失（服薬せず），また3日間発疹という状態が年末まで続いた。翌年1月（4：11），総合病院小児科受診，「慢性尋麻疹」と診断。しかし，アレルゲンはなく，精神的な原因を疑われて，某相談機関を紹介され，そこの心理臨床家に，Yは遊戯療法，Mは育児についての指導助言を計8回受ける（2月―4月）。症状の一時沈静はみられたが，再発したため，8月より上記治療者がYの遊戯療法に専念し，筆者が母親面接に携わることとなった。

(5) Yの生育歴

満期正常産。1ケ月間混合栄養。以後人工栄養。発達上特に問題なし。1才半よりMは店に出，Yは父方祖母に世話してもらう。2才2ケ月の時保育所入所。3才時妹誕生。3才4ケ月の時，父方祖父が病気になり，Mが看病せねばならず，Yは大阪の母方祖母に預けられる。1ケ月目祖母から「しょげかえっていて見てられないので迎えに来るように」との電話があったが，その時に迎えに行けず，それから1ケ月後ひきとりに行く。初回時Yは保育所に通っており，妹は祖母の家で祖母が養育する。Yは帰宅して祖母の家に行こうとするが，妹と一緒だとけんかしていけないというのでYだけ帰される。父母に甘えようとするが，「今お客様だから」と云われ，黙って二階にあがり，一人でテレビを見ていることが多い。家では妹をいじめることはない。保育所では友だち多く活発である。

(6) 初回面接時の母親の印象

スラッとして，均整のとれたスタイル，色白の美人でやさしそうな顔つき。話は表面的でやや防衛が強い感じを受ける。落ちついて，おとなしい感じ。Yのことを述べるのに淡々としすぎているという感じがする。

(7) Yの印象

体格は普通，色黒で活発そうだが，筆者に対してははにかみが強く，しゃべらない。

(8) 治療方針

これまで母子に同一の治療者が関わってきたが，治療効果がみられず，特に親の治療への動機づけが得られなかったようである。そこで，子どもと母親の担当者を別にして，相互に情報交換をしつつ，子どもの治療の補助手段として母親面接を行なうこととなった。母親面接においては，母親の気持を受容し，支持的（supportive）に関わり，子どもの治療に対して協力的になってもらい，Yの生活環境を改善していくよう，適宜助言を与えることとした。また，かかりつけの医師からの投薬は続けている。

Ⅲ．面接経過

面接は，19××年8月1日より翌年7月17日まで計29回行なった。以下面接経過を母子関係の変化に焦点をあてて，初期（治療導入期），中期（展開期），後期（終結期）の3期に分けて記述する。Yの尋麻疹の状態（母親陳述）については，別に抜き出して表1にまとめた。

(1) **初期**（第1回8/1～第10回1/8）

この期は，Mの方の都合（Yの交通事故，妹の病気など）や筆者の都合がうまくつかず，面接は軌道に乗っていない。またMの母親面接へのモチベーションは高くない時期。

第1回　Yは尋麻疹のことを云われるのを嫌がる。妹の面倒をよく見るし，あまり手のかからない子である。Yに対して祖母（Mの姑）がとても甘やかすから，せめて家でMが見ているときぐらい，きちんとしつけなければという気があって，あまり甘やかすことをしなかったし，Yの方から甘えたがるということもなかった。

第2回　生育史（前記）を語る。あまりべたべたくっつかないし，親離れがよく，とても楽な子であった。Y3才の夏，大阪の祖母に預けた時のこと。ここへ来るようになってから，今までの自分の養育態度について反省するようになった。今思えば，あまり甘やかすことをしなかったし，話しかけてやったりすることも少なかったと思う。尋麻疹の前は夜尿があった。Mと姑の関係，Yと父の関係は別に悪くない。Yは，最近べたべた甘えたり，幼児語を遣ったりする。

第3回　保育所で，この頃よくキックしたり，叩いたりすると友だちのお母さんが園に文句を云われ，園から

連絡があった。多分雨降り続きで外で遊べないから不満があって暴れるのだろう。夫は子どもの喧嘩だから気にしなくていいと云う。妹としょっちゅう喧嘩してよく泣かすので，Yを叱ることが多い。父とは，相当激しい運動や遊びの相手をしてもらっている。

第4回　尋麻疹が出たのを見た時，その日一日のMの行動をふりかえってみて，Yちゃんに悪いようなことは何もしていない。むしろYちゃんとつきあう時間はいつもより長かったし，いい感じだったと思う。お祭りに連れて行ったりして，Yちゃんもとても喜んでいた。そういう後で出たものだから，あんまり（自分の行動と）関係ないんじゃないかと思った。保育園へ一日保母で行ったけど，YはMを全く無視して傍によって来ず，よそよそしい。恥かしがりやだからとも思ったけど，先生も「Yちゃんは変だね。はずかしいんだね」と云われた。婚家先の複雑な人間関係について話す（前記）。

第5回　（2ケ月ぶりの面接，Y交通事故）Yの交通事故の話。不幸中の幸で打撲だけだったので，通院で治癒したのでほっとした。MがYを賞めてやったり，声をかけてやったりした時，べたべたと甘える感じで，幼児語をしきりに遣う。赤ちゃんの時から一人で寝ていて，Mのところへ入ってくることなどほとんどない。Mは添寝など絶対に出来ず，自分一人でないと寝れないから，小さい時からそのようにしている。

第6回　（1ケ月ぶりの来室）ここに来ている時はあまり出ないのに，来なくなると出るような気がする。2才で保育園にいれたことと，大阪に2ケ月預けたことが，Yにとって大変ショックであったのだと思う。「本当にかわいそうなことをしました」と述べる。保育園へ4月から入れて9月いっぱい，まる5ケ月泣き通しだった。この2つのこと以外には，Yの尋麻疹の原因となるような出来事は全く思いつかない。尋麻疹が出るようになってから，また交通事故にあった時などに，とても過敏で神経質な子だということがわかった。

第7回　Yはよく動きまわってじっとしていない。母子関係についても何ら気にかかることはない。

(2)　中期（第11回 1/19〜第23回 5/6）

Yの尋麻疹の症状は固定化し，更にはこれまでにない最悪の状態だという程ひどくなった。Mは，徐々に自分とYとのかかわり方に気づき，これまでの養育態度をふりかえり，問いかえす作業をしていった。筆者に対して，時には不信感が強まったり，Yの症状は精神的なものとの診断を否定したくなったり，それでも自分との関わりがYの情緒的安定と充分関わりがあるという気もして，そうした葛藤をくりかえしつつ，筆者との信頼関係は深まっていったように思われる。

第8回　（Mは髪をアップにして顔が変ったと思えるほど明るい感じ）寝る前に話をしてやったり，本を読んでやったりした時や，すごく甘えてくるときに，尋麻疹はあまり出ないような気がする。だけど精神的なものでどうしてこうなるのか不思議でしょうがない。父親と体ごとぶつかりあうような相手をしてもらっているときでも出る。Yにはどんな治療がされているのだろうか。保育所では全く問題なくうまくやっている。保育所で問題児と云われている子のお母さんと話したことあるけど，その子は尋麻疹など出ないのに……。

第9回　店がとても多忙。兄妹が階段で衝突して妹が転がり落ちた。父がかーときて，ものすごくYを叱った。Yが故意にやったのではないのに頭ごなしに叱ったことに対していけなかったと思ったけど，とても忙しくて手が放せず，そのままにしておいた。夕方，「このかゆいの何とかならんかなー」と云ったので見てみると，ぎっしり出ていたのでびっくりして薬を塗ってやった。筆者はY担当の治療者から聞いたプレイ場面での話（Yは「甘えたいけど甘えられん」と云った）をMに話す。それを受けてMが昨夜テレビを見ていたら，ふっとYが背中におぶさってきて，べたっともたれかかった。こんなことはなかったことでびっくりした。そのままにさせて体をゆすってやったらとても喜んでキャッキャッとはしゃいだ。M自身，Yは男の子だから甘えたりするのはよくないと思ってたので，甘えさせなかったというところもある。

第10回　（尋麻疹がひどいので病院に連れていった。）（医者のいい方に対して）「もうちょっと他のいい方があったろうに」と不満を述べる。Yは，この1週間体の調子が悪く，嘔吐や下痢をして食欲もない。Mにおぶさってきたり，膝にひょいと抱かれたりして，少しずつだけど甘えを見せている。Yが妹に「お母ちゃんはこわいけどやさしいよ」と云っていた。

第11回　Y誕生までのこと。大阪で夫と知り合い，結婚して松江に住むようになった。大阪の繁華街で育ってきたので今のような田舎（松江の郊外）の生活は始めて。8年たった今やっとここが自分の家という気がするようになった。Yは母方の初孫だし，父方祖母（後妻）にとってはやはり初孫なので，生まれるまでMはとても大事にしてもらったし，Yが生まれてからも皆からかわいがられて大変なものだった。Y出産の後大出血して意識不明になり，その間に母乳はとまって，それでもほぼ1ケ月は飲ませたけどあとは人工乳のみで育てた。

第12回　先週1週間Mの実家に帰省。大阪での様子を

報告。尋麻疹の薬を飲ましていたら，家の者からいろいろ聞かれた。「あまり云わないで，気にするから」と云う。あとで母が，以前預っている時にもあせものような尋麻疹がでていたと云った。自分は知らなかったけど，そんな以前からもう出ていたらしい。病気をするとすぐ泣いたり，甘えたりする。そんな時は不思議と尋麻疹はでない。これまでの養育態度について語る。（1回目に語ったようなこと）。小さい頃からよく泣いていたけど，男の子のくせにメソメソしてはいけないとか逞しく育てなくてはということでつきはなしていた面がある。Mはべたっと甘えてくるようなことは好まなかったし，そんなに甘えさせなかった。家ではとにかくよく泣く。筆者は，泣くことをYの側に立って考えてみたらと助言。Mは自分の行動を思いかえしてか，多忙さゆえ，いつでもゆとりをもって心を開いて接することのできない現実を思ってか一瞬涙ぐむ。筆者にMの気持がよく伝わってくる。

第13回　最近Yが園での様子をボツボツではあるが話すようになった。祖母がYにうるさく云ってると本家のお嫁さん（義兄の長男の嫁）が云っていた。祖母（姑）とMの関係は特に悪いわけではない。気に障ったりすれば，姑の方が全然顔を出さなくなるから，別にそれ以上悪い関係にはならない。尋麻疹は一向によくならないし，この忙しいのにわざわざここへ行かなくてもよいというのが姑や夫の考え。Mは前のこと（中断）があるから，そんなに焦っても仕方がないと思って腹を据えてるけど，あまり回りがうるさいと本当に治るだろうかと不安は感じる。だけどYが喜んで来るのだから，いつまで続くかわからないけど連れて来ようと思っている。尋麻疹はずっと同じ調子で出ている。毎夜薬を飲ませている。薬を飲ませているからあの程度なのかとも思う。薬を飲ませるのは，夜中にワーッと出たらかなわないから。Yの方から薬を飲ませてと云って来たことはない。筆者は，「尋麻疹はYちゃんの内なるものの表現だと思われるから，その表現を一時的に抑えてしまっても，根本的に治るということにはならないのじゃないかしら。思いきって，Yちゃんが薬を飲むと云わない限り内服薬はやめて，痒くなった時に，お母さんが塗薬を塗ってあげられたらどうでしょう。」と提案する。Mは，そんなこと出来るだろうかと不安な顔付きで，「多分ワーッとぎっしり出るでしょうね」と云いながらも，この次まで，薬なしで出るだけ出してみようと応じる。

第14回　この前薬をやめたらという話になった時，どうしようと不安に思った。だから，Yの方から「薬は？」と云った時は，内心ほっとした。薬は飲まさなかったが絶えず尋麻疹のことが気になった。服薬はしなかったが，外用薬はよく塗ってやった。薬を塗ってやってるのを妹が見て羨しく思ったのか「Hちゃんも痒い！　薬ぬって。」という。塗薬は使っても，服薬しないのに，ひどくなるということもないようだし，Mが思ってる程，痒くはないようだ。先月，雪の日，迎えの帰りに，「こんなに雪が降ったらお母ちゃんよう運転せんわ。送り迎えもできんようになる」と云ったら，「センター（相談室）も行かんかね」とYが云った。全然関係ない話なのに，センターのことをふっと云ったのを聞いて，「センターへ行く頃には雪はやんでるわ」と答えた。Yの中に，センターが大きく位置しているようだ。センターへ通う道中，何となく話しぶりがいつもと違い，ベタベタと甘えた変ないい方をする。

第15回　Mは尋麻疹のことをすっかり忘れる程，おまけに来所することも忘れてしまっていた。Yに云われてはじめて想い出した。今までは片時もYの尋麻疹のことが頭を離れなかった。Yを見ると尋麻疹はどうかなという感じで，薬を飲ませないとと思っていた。こんなに薬を常用していることで，もう1年以上も服薬をしていることで副作用や薬害があらわれてくるのではと不安だった。薬を飲ませなくてもやっていけるということで，気分が楽になり，また不安もなくなった。これまで「薬飲んどこうや。薬飲まんと困るが一」と云ってたことは，Yが困るのではなくて，M自身が困るということだったんだということに気がついた。これからも尋麻疹はすぐには消えないにしても，薬なしでやっていけると思うととても気が楽だし，痒がったら塗り薬を塗ってやればいいというのんびりした気分になっている。（筆者から）薬をやめてみたらと云われた時，そんなことできるだろうか，絶対できないと思ったけど，結果は予想外だった。Yはこの頃とてもよく話すようになった。これまではあれこれMが話しかけても「うん」とか「ふん」とかだけで，ほとんど反応がなかった。のれんに腕おしといった感じで，何を考えてるのかしらという気がしていた。それが，この頃は，細々としたことをいろいろ話しかけてくるようになった。また，薬をやめてからとてもよく食べるようになった。Yはここをとても楽しみにしている。Yにはまだここが必要なようだから，Yが行きたがる間は連れて来ようと思う。

第16回　最近とても多忙。夕食が遅いので，その間おやつを食べたりしてるが，父親がそれを見てすごく怒る（食事の時食べれないから）。そんなわけで夕食があまり食べれないと，Mにそっと耳もとで「お母ちゃん，おなかがいっぱいでもう食べれんけん」と云う。今までは父

に云うでもなく，Mに云うでもないといった感じで，ひとりごとのように云っていたのが，この頃はMだけにそっと云う。Mはわかってくれるといった信頼関係ができたように思う。

第17回　Yにせかされてあわてて出かけて1時間も早く来てしまった。ずっと考えてみるに，YとMのかかわりが密の時には，尋麻疹があまり出ないような気がする。

だけどどうしてこうもしつこく出るのかしらと思うこともあり，本当はどこか，内科的に悪いのではないかとも思ったりする。ここのところまた状態が悪く，くり返しだなあと思う。一時忘れるくらいよくなったことがあるが，あの頃は店も割合暇で，Yとかかわりがもてたから，やはりそういうことが関係するのかもしれない。再びYの生いたちについて語る。M自身両親が忙しかったからちっともかまってもらわなかった。放ったらかしにしておかれたけど別に尋麻疹はでなかったのに……。

第18回　前に，土・日など忙しくてあまりかかわりのもてない時によけい出ていたような気がしていたけど，そうでもないようだ。精神的なものだと云われてもどうかという気がしている。接触を密にしてやっていても，出る時は出るし，そんなことは関係ないようだ。こんな状態が続くようなら夏休みにでも，どこかちゃんとしたところで診てもらおうと思う。夫は心の底では精神的なものを否定していると思う。筆者が尋麻疹を通してYとのつながりが密になっているのではないだろうかと問いかけると，Mはしばらく考えて，尋麻疹がでるからいやでもYのことを考えずにはいられない自分と，父親のYに対する対し方の違いに気づく。

第19回　（Yは入学して3日目）ぐったり疲れているので「今日センター行けるの？」と聞くと「行く，行く」と云った。登校に45分もかかるし，重い荷物をもってとても大変だと思う。だけど学校はおもしろいらしい。

第20回　尋麻疹はこれまでで最高の出方。「薬飲む？」と云うと待っていたとばかりに「うん飲む」と云ったので薬を飲ませてすぐに寝かせた。よほど疲れていたらしく，二階も階下も客があり賑かだったが，ぐっすり寝ていた。翌朝は気嫌よく起きてきて，尋麻疹もすっかり消えていた。これまでセンターへ行くことに積極的だったのに「今日はセンターだよ」とMが云ったら，「センター行くの？　また」と不服そうに云った。こんなことは初めてのこと（Mの表情やわらか）。

第21回　（Y担当者と合同面接）これまでYの変化はあまり認められないと述べていたMが，「大分変わりました。」と述べる。何でもないことでもMにしてくれと云ってくるし，話しかけてくる。べったりくっついてくる感じ。Y担当者からプレイ場面での変化について話してもらう。また，彼女からYが「ぼく1才ぐらいの時にもだっこしてもらったことない」と云ったということを聞いて，Mはびっくりしたように「本当ですか！」と聞きかえす。「小さい頃なかなか寝つかず，夜ずっとだっこして連れ歩いて寝かしつけたりしたけど，それはYにとってだっこされたという感じではなかったんですね」と云う。

第22回　これでもう尋麻疹は出なくなるのかと思っていたけど，やはりまだ親子関係も危っかしい気がする。ちょっとのことですぐもとにかえってしまうような気がする。前回のYの云ったことばがショックで，Yの幼時のことをふりかえって考えた。「やはり私自身に一番の問題があったんだと本当に思いました」としんみり述べる。

第23回　「これまでは尋麻疹が出ても，Yの方から『薬塗って！』ということはなく，痒そうにかいているのを見て，Mが『薬塗ってあげようか』というと『うん』という感じだったのに，自分から『塗って』というようになったのは変わりましたね」と筆者が云うと初めて気がついたように「そう云えばそうですね」と頷く。Mが暇ができてボケッとしていたりすると，そばに寄ってきて話しかけたり，背中からもたれかかったりしてくる。忙しい時はよくわかっていて，絶対にそばに寄って来ない。その点Yはとても敏感である。これまでMの布団の中に入って来たりしなかったのに，Mが「入っていいよ」というとすーと入ってくる。以前だったらそう云っても「(入らなくて）いい」と云って入ってこなかった。

(3)　後期（第24回5/12〜第29回7/17）

体中，これ以上出ようがないというほど激しい尋麻疹が出たあと，徐々に症状は消滅していった。MはYの尋麻疹のことを忘れてしまうほどになり，ゆったりした気分でYと関われるようになった。「死ぬまでセンターに通う」といっていたYも友だちと遊ぶ方がいいようになり，終結に至った。

第24回　登校が大変な様子。砂埃の道を長時間歩いて帰るので，ランドセルは埃で字が書けるほど。尋麻疹はMは8分どころもうよくなるという気がしている。夫も治るという確信をもつようになった。姑，義兄，夫などの人間関係について，その複雑な関係を話す（前述）。Mも筆者も終結が間近いと感じる。

第25回　Yはまだセンター来所を楽しみにしている。Mはもうセンターへ行かなくてもいいと云ってくれない

表　1　母親陳述による尋麻疹の状態

期	回	症状
初期	1	2週間前から発疹がかなりひどくなってきた。薬を付けてもよくならない。
	2	この前からずっと出っぱなし。体中バーと出ているが，気にしないようにしている。よほど痒い時には薬を塗ってくれという。服薬も本人まかせ。
	3	前回以後出なくなった。
	4	3日ほど前の夜，パンツの紐のあとに左右ひとつずつ湿疹のあとがあった。Yは蚊に噛まれたから薬をつけてくれと云ってきた。Mは「あー，またでたわ」と思ったけど，「蚊に噛まれたね」といって，薬をつけてやる。薬は飲んでいない。
	5	出たりひいたりのくりかえし。今も少し出ている。この間，ぎっしり出たことがあって，皮膚科にかかった。
	6	「ずーと出てますわ！毎日」。薬を飲んでいても出る。N病院（総合）にかかった方がいいのだろうかと考えたりする。
	7	ここのところずっと同じ調子で出ているので服薬も続けている。
中期	8	「やっぱり出てますよ，ずーと」。薬の回数を減らすととたんに多く出るので，毎日1～2回は服薬させている。
	9	尋麻疹が今最高に悪い状態。首の方まで出ていて，薬を飲んでもきかないから，明日N病院に行こうと思っている。この頃夜尿もある。
	10	N病院に行ったけど，ろくに体を見もしないで，「検査で異常がでていないから，この尋麻疹は治らないでしょう。薬を飲むのはかゆみをとめるだけです。尋麻疹そのものを治す薬なんかないですよ」と言われた。先月の20日頃から，もう1月以上もずっと状態は悪い。一日3回薬を飲ませてもずっと出ている。
	11	あいかわらずずっと出ている。薬は夜は必ず飲ましているけど，飲まさなければどうなることかと思う。ぎっしり出ていて，痒いだろうと思うけど，かいてくれとか，薬をつけてとは言わない。この頃は，おなかより，背中の方にいっぱい出ている。
	12	ずっと同じ状態で出ている。ひどくもならず軽くもならず，といった状態で固定した態じ。
	13	大体ずっと同じ調子で出ている。毎夜薬を飲ましているからあの程度なのかとも思う。Yの方から薬を飲みたいと言ったことはない。
	14	（服薬中止してみる）「やっぱり出てますわ」10日間のうち薬を飲ましたのは4日だけ。
中期	15	この1週間，1度だけ，「痒いから薬を塗って」といった。「薬飲んどく？」と聞いたけど「いや」といったので「まあいいわ。ひどくなったら，また飲まそう」と思った。そのあと一度も塗ってくれとも言わなかった。
	16	3日間とてもひどかったけど，Mが薬をつけてあげようかと言っても，「つけなくていい」と言う。あとはほとんど出なかった。
	17	ずっと出ている。日曜日の夕方，あまりひどいので「薬飲む？」と聞くと「飲む」といったので飲ませた。
	18	「ずっと変わりませんわ。ずっと出てます！」と投げつけるように言う。だけど外用薬だけつかっている。 （Mいらだち。精神的なものを否定したい気持）
	19	（小学校に入学して3日目でぐったり疲れている） 頭の中から首，額など今まで出ていなかったところに出るようになった。
	20	前回ここからの帰り尋麻疹はますますひどくなって，車の中でも痒がった。「どうしてこんなにずっと出ているの？」とYが言った。これまでで最高の出方で，薬を塗ってやろうにも，どこに塗ってよいかわからない程。出るだけ出たら消えるのでは……という気もする。
	21	尋麻疹はほとんど出なくなり忘れるくらい。
	22	「また出ました」。でも，この前ほどひどくない。
	23	尋麻疹は出たり出なかったり。1週間のうちひどく出るのは1日ぐらいで，全く出ないのも1～2日あとは少し位出ている。
後期	24	ポツポツと2～3個出ているけど，この1週間は1度も薬をつけなかった。昨年の暮以来初めてのこと。掌のつけねのところにポツンと赤くはれて出ていたのをMが「どうしたの？」と聞いたら「またかゆいのがでてる。ぼくだけどうしてこんなのが出るんかなあ」とYはつぶやく。
	25	（2週間ぶりの来室）もうほとんど出なくなった。出てるかどうかさがさないとわからないほど。Mも忘れていることの方が多い。
	26	もう全く出なくなった。
	27	（3週間ぶりの来室）前回の後よりまたボツボツと出はじめた。足の甲にぎっしり出た。
	28	（12日ぶりの来室）もうずっと出ていないし，Mも出てるかどうかも気にならなくなった。「薬ももうすててしまいました。」
	29	（11日ぶりの来室）全く出なくなった。

のかと思うけど，まだまだセンターへ行くことを楽しみにしているようで，友だちと遊んでいても時間には必らず帰ってくる。一度失敗してるから，今度はもう絶対大丈夫というところまで，Yがここへ来たくなくなるまで続けようと思う。この間ごろまではYにとても気をつかったし，こんなこと云っていいのだろうかとか，云ってしまってからあんな云い方はいけなかったと思ったりしたが，今はそんなこともあまり気にならなくなった。夫はYがMにべったりなので，妹の方をとてもかわいがる。これまでのことを振り返り，尋麻疹がでなかったらMのYに対する思いは，現在のようではなかったと思うと語る。筆者は，MのYへの思いやり，愛情がにじみでるような話しぶりだと感じた。

第26回　この前帰宅する車の中で，「Yちゃん，もしセンターへ行きたくなかったらもうやめていいんだよ」というと，「ううん，ぼくずーと行くもん，死ぬまで行くよ」と答えた。Mもそれを聞いて，Yはまだまだセンターから離れられないんだと感じた。それから一週間，一度もセンターの話はしなかった。Mが「今日センターだけどどうする？」というと，「行く行く」と云った。多分Mが云わなかったら，今日はセンターのこと思い出さなかったかもしれない。行く準備をしてから「センターどうしようかな…」とちょっと云ったけど，一緒に出かけてきた。

第27回（3週ぶりの来所。先週予約の日Yは友だちと遊ぶ約束をしたからセンターへ行かないとMより tel。）この頃Mがしつこくいうと「うーん」とか「うるさいなー」とか云うようになった。これまではしつこく云っても黙っていたけど，ずいぶん変ったと思った。自分の意見が出せるようになったんだと思う。家庭訪問があり，学校でのYの話を聞く。学校ではのびのびしてくったくがないと云われた。

第28回　Yが「算数の宿題せんならんからセンター行くのやめようかな」と云った。算数の宿題があっても，いつもは友だちと遊ぶほうが先で，夜になってからちょこっと片づけるといった風で，宿題が理由とは考えられないと思う。やはりもうY自身センターへ行くのが億却になってきていると思われる。この頃では，センターのことなどYの口から出たことがない。筆者は，終結について話し合い，Yにも確かめてみようと伝える。再び治療経過についてMとともにふりかえって話す。Mは，「私が治療をうけていたんだと思います。（プレイの場で現われるYの行動が家庭での関係を反映するなど）はじめは信じられなかったです。そんなことあるだろうかと。だけどここへ来て私が治療を受けたから，Yちゃんが変ったんだと思えるようになりました」と述べる。

第29回　Yの元気な様子について話す。センターのこと云わなくなったことと，もう一つはめったに泣かなくなったこと。今思えば泣くことで自己主張していたのだと思う。本当にYは逞しくなってきた。MはYの症状の波に一喜一憂しながら，自分自身のYへのかかわり方がYに変化をもたらしたことを実感として晴れやかに語る。「ほんに勉強になりました。Yちゃんがあんなにならなかったらきっと私はあのままだったと思います。そして，もっと大きくなってから症状が出たとすれば，もっともっと大変だったと思います。この後また何か親子の間であったとしても，うまくやっていけるような気がします。」筆者もMと同じように将来に明るい見通しをもちながら終結とする。Yもセンターへの未練なく逞しく去っていった。

Ⅳ．考　　察

情緒反応の過敏な子どもは，身体的な過敏性を同時にもつことが多いと云われている。これは自律神経の過敏性と関係が深く，その一部は，体質的あるいは遺伝的素因とも考えられ，この傾向の強い子どもが情緒障害を起こすと精神身体症状を現わすことが多い（高木 1969）。また高木によれば，過敏性（神経質傾向）を強める環境因子としては，物的，地理的環境や家族の状況，同胞順位などの静的条件より，両親の性格や親子間の精神的つながりの深さ，直接には，しつけや教育態度などであることが明らかにされている。

本事例においても，Y自身の体質的，素質的要因に加えて，母子間の力動性，養育態度，家庭環境，母親の性格特徴，それらと密接にかかわるYの生育歴などいくつかの要因が発症につながるものとして考えられるが，以下若干考察していきたい。

Mの養育態度は，「昼間祖母にまかせて甘やかされているから，自分はきちんとしつけなければ」という意識が強かったようであるし，男の子だから「甘えたりするのはよくない」，「逞しくなければいけない」，「メソメソしてはいけない」という男の子らしさを期待する傾向がみられる。また，Mは淡白な性格で，「あまり甘えられるのはいや」で「べたべたされるのは気持悪く」，「（自分）一人でないと寝れないから添寝などしてやれない」など，子どもとの間に距離を置いていたと推察される。Yの方も親の気持を敏感に感じとって，「あまりべたべたくっつかない」「手のかからない子」で，「妹の面倒をよく見る」「親離れのよい子」であったとMは述懐して

いる。Yにとってのmは，「甘えたいけど，甘えられない」存在で，実際にはなかなか寝つかないYをだっこして寝かしつけたという経験がMにはあるのに，Yはプレイ場面で「ぼく1才ぐらいの時にもだっこされたことがない」と述べ，また保育園の一日保母では，Mを全く無視するかのように傍にも寄って来ず，Mに「変な感じ」を抱かせるような態度でMを意識している。

母子関係は云うまでもなく，母と子の相互交渉によって安定もし，不安定にもなるという力動的関係であるが，Y母子の関係は，〈心理的すれちがい〉，〈歯車の噛みあわなさ〉が窮われ，基本的信頼関係が形成されていなかったようである。

Yの生育史を辿ってみると，前述したように，1才半でMが店に出たため，祖母に養育され，2才2ケ月で保育所へ入所（5ケ月間泣きどおしで登園を嫌がった），3才の時，妹出生，3才4ケ月の時，2ケ月間祖父が病気のため遠く離れたMの実家に預けられるなどの出来事が特記できる。安定した母子関係が確立されないまま，急激な母子分離が行なわれると，子どもの緊張感，不安感は極度に達し，Yは，「しょげかえっていて見てられない」と祖母から電話があるほどの憔悴状態となったことは当然のことと思われる。しかし，多忙のため，それから1ケ月経ってやっとMは迎えに行ったということで，Mも「あの時は，本当にかわいそうなことをしました」と当時を涙ぐみながら回想していたが，幼いYにとっては，強烈な心的外傷となったと推察される。アモン（Amon, G 1979）が「子どもの心身症状は，母親とのコミュニケーションの断続を知らせるものである」と述べているように，Yの尋麻疹という症状は，母親に対して，自らの身体に絶えず眼をむけて欲しいという無意識の訴えであり，叫びであったのだと云えよう。

次に，約1年にわたる面接経過をふりかえって，母子関係の変化をみてみたい。

初期は，5ケ月間に10回と未だ面接は軌道に乗らず，Mにとって母親面接の意義は認められない。話の内容も表面的であまり深まらず，淡々とした口調で語られた。Yの尋麻疹は心因性であると医師に診断され，心理治療を受けに来所したのだが，一時症状が沈静すると，Yはまだ来所したがっていたにも拘らず，早々と来所を中断してしまう。しかし，まもなく症状が再発して治療が再開された。当初は主としてYの生育史，Mの養育態度について語られた。Mはこれまでの養育態度（「あまり甘やかすことをしなかった」「話しかけてやることも少なかった」などその他前述）をふりかえって反省し，かかわり方を気づかうようになっていくが，まだ自分と子どもとの力動的関係の否認や治療に対するアンビバレントな感情が強く感じられた。一方Yの方は，これまでに同じ治療者によって8回の遊戯療法を受けているので，再開されると早くも治療的退行を来たし，べたべた甘えたり，幼児語が出現したり，さらには情緒的解放が促進されて攻撃性が強まり，保育園から苦情が出たりしたほどである。この時期の甘えに対してMは，急に子どもが変わって甘えを見せ始めたことに戸惑いを感じていた。筆者は，遊戯治療によるYの変化と母親としてのかかわり方について助言した。面接中期になると，Yの尋麻疹は消失するどころか一層増悪し，Mは「心因性」に疑問を抱き，専門医に連れていくが，安心できるような応待は得られず焦燥感を募らせた。一向に消失しない症状に対して，夫や姑は，多忙な中，Mが出かけていくことに理解を示さなかった。Mとしては，一度中断しているから，今度はYが行きたがる間は連れて来ようと覚悟はするものの，本当に治るのだろうかとの不安は消えなかった。13回目に筆者は，薬の中止を提案し，Mは不安を抱きながらもそれを実行に移した。結果は予想外で，症状は服薬と関係ないことがわかり，尋麻疹を正面から受け入れようという気持になった。尋麻疹が出た時に，MがYを間近にひきよせ，やさしく薬を塗布してやっている情景は，妹が羨ましがるほど暖かく，母と子のふれ合いの場であって，そんな形でのスキンシップが，深く快い母子の心のつながりの場となったと推察される。それまでは，痒くても薬を塗ってほしいと要求しなかったYが，自ら「薬塗って！」と云って来るようになった。Mは内服薬を常用していることで，服薬による副作用や薬害が，絶えず心にかかっていたが，服薬させなくてもやっていけるということで気持が楽になった。そして，「薬飲んどこうや，飲まんと困るが…。」と云っていたのは，Yが困まるのではなくて，M自身が困まることだったということに気づくようになった。Yは，テレビを見ているMの背中にひょいとおぶさってきたり，保育園での出来事でも細々と話すようになったり，Mの布団の中に入って来たりと徐々にMに素直に甘えが出せるようになり，Mには何でも話せるという感じで信頼関係が深まっていった。

しかし，Mは長びく症状に，やはり精神的なものを否定したくなったり，筆者やY担当者に対する不信感も揺れ動いていたので，21回では，Y担当者を交えて3人で話し合う機会をもった。そこでY担当者から，Yが，「1才ぐらいの時にもだっこしてもらったことがない」といったということを聞いて，Mは大変ショックを受けた。そして，次回でMは，「Y4才の頃，家族で天神祭

に出かけた。大勢の人で押し流されそうになった。夫は下の子をだっこしていて，MはYがつぶされると思って抱き上げて，ずっと人波の中を歩いていったら，Yはとても嬉しがった。人が少なくなったところで下したら，もっとだっこしてくれと云った」ことを回想し，これまでずっと忘れていたけど，「だっこしてもらってない」とYが云ったことを聞いて，あの時のYの表情や情景を想い出し，「やはり私自身に一番問題があったんだと本当に思いました。」と洞察に到った。18回目のあと，Yは小学校に入学し，片道45分もかかる道のりを徒歩で通学するようになった。環境の変化に伴うストレスや疲労も影響してか，尋麻疹はこれまでにない程，全身に現われたが，24回目以降は減少していった。この頃の母子関係は，Mがしつこく云うと「うるさいなー」と云うようになり，自分の意見や気持が出せるようになってきた。25回では，長い治療経過をふりかえり，Yの尋麻疹を通してこれまでの母子関係，養育態度に気づかされ，まさに母子ともに育ち合うことができたことを感慨深く語った。28回では，「私が治療を受けていたんだと思います。（プレイの場であらわれるYの行動が家庭でのそれを反映するなど）そんなことあるだろうかと初めは信じられんかったです。だけどここへ来て私が治療を受けたから，Yちゃんが変わってきたんだと思えるようになりました」ととても穏かな表情で語る。死ぬまでセンターに通うと云っていたYも，センターに行く日を忘れるくらいで，友だちと遊ぶことに熱中するようになり終結に至った。

並行母親面接の利点及び問題点については，小此木（1969），田畑（1980），河合（1982），滝口（1986）に報告されている。母親と子どもの関係，母親と治療者の関係，母親自身の問題，その他によって，面接の目的，経過はさまざまであると思われる。本事例の場合，母親のパーソナリティの問題，夫や姑を含めた家族力動についてはほとんどふれなかった。母親は，子ども担当者との合同面接をするまでは，絶えず心理治療に対してアンビバレントな状態であり，そのこと自体が母親の自我を防衛する方法であり，母親の精神内界に深く踏みこまない形での面接に終始したが，親の役割の洞察と遂行，親自身の安定，子どもとの信頼関係の成立という課題は達成されたのではないかと考える。筆者は，母親MさんとYちゃんを通じて実に多くのことを学ばせていただいた。

V．まとめ

5才6ケ月の長男の慢性尋麻疹が精神的なものであると専門医に診断され，心理療法をすすめられて来談した母親に対して，子どもの遊戯療法と並行して，母親面接を約1年間，計29回行なった。

その面接経過から，子どもの尋麻疹発症の要因および母子関係の変化について考察した。

尋麻疹発症の要因としては，子ども自身の素質的，体質的過敏性に加えて，母子間の力動性，養育態度，母親の性格特徴，それらと密接に関わる子どもの生育史などが考えられた。子どもは，長男として期待され，母親の理想とする男の子像の枠の中で，幼児期充分甘えさせてもらえなかった。子どもにとっての母親は，「甘えたくても甘えられない」存在で，母子間にくい違いが多く，ぎこちない関係であったが，治療の経過にともなって，母子間の心の交流が深まり，信頼関係が成立し，それにつれて，尋麻疹は消失していった。母親面接でなされたことは，母親の役割の洞察と遂行，親自身の安定，子どもとの信頼関係の成立であったと考えられる。

Ⅵ　参考文献

アモン・G，青木宏之訳；1979．精神分析と心身医学．岩崎学術出版社．

岩波文門，赤木　稔；1980．現代精神医学大系．17　B．児童精神医学Ⅱ．4．精神身体症状と行動異常，中山書店．

河合隼雄；1982．児童の治療における親子並行面接の実際．季刊精神療法　8（2）．113-125．

前田重治；1978．心理療法の進め方一簡易精神分析の実際一．創元社．

小此木啓吾他；1969．児童治療における並行母親面接（その1）（その2）．児童精神医学とその近接領域，10．160-179．

大西俊江，小椋たみ子；1982．一吃音児の母親面接過程の研究．島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編），16．71-87．

田畑洋子；1980．併行母親面接の治療過程に関する一研究．児童精神医学とその近接領域，21（4），236-247．

高木俊一郎；1969．児童心理学講座　6　情緒．欲求，動機，金子書房．

高木俊一郎；1985．新小児医学大系　14　B　小児精神医学　Ⅱ　中山書店．

滝口俊子；1986．児童・思春期治療における並行親面接の諸問題，家族心理学年報　4　金子書房．